

北海道銀杏会第7回講演会

日時 2010年7月20日(火) 正午～13時30分

場所 ホテルオークラ札幌 B1 「中国料理 桃花林(とうかりん)」

講師 医療法人 医仁会中村記念病院理事長・院長 中村 博彦 様 (S52 医学部卒)

演題 「札幌市における脳卒中救急医療の現状」

本日は昭和41年に日本初の脳神経外科専門病院として開設され、最近ではメディアの「治療力」ランクで脳卒中部門全国2位・脳腫瘍部門全国4位の実力病院にランキングされている中村記念病院の中村理事長を講師にお迎えし、ご専門である「脳卒中」を巡る医療体制の現状や課題についてお話しいただきました。

脳卒中は近年では医療技術の進歩により完治する人も多いようですが、かつては日本人の死亡率のトップをしめ、現在でも「がん」、「心疾患」に次ぎ、死亡原因の第3位をしめる疾患です。

講演会では初めに、脳卒中といわれている疾患について詳しくお話しいただきました。

脳卒中といわれる脳血管疾患の約7割は脳内血管が詰まる「脳梗塞(のうこうそく)」、そして残りの3割は血管が破れて出血する「脳出血」「くも膜下出血」などで、「脳梗塞」は梗塞の場所や原因によってさらに「ラクナ梗塞」、「血栓性梗塞」、「心原性脳塞栓」などに分けられること。

「脳梗塞」は、発症から2時間以内に専門病院に搬送できれば、血栓の溶解に効果が期待できるtPAの投与による治療が可能であること。にもかかわらず、現状では比較的軽い症状の血栓性梗塞の場合、初期症状があっても病状の様子を見る人が多く、残念ながらtPA治療が可能な発症直後に来院する患者はそう多くない。

首都圏では、病院は数多くあるが、救急患者の搬送ではあちこちと「たらい回し」にされることも少なくない。また特に患者がVIPの場合、何処に入院させるかなどと入院先の照会や相談に時間がかかり、搬送が遅れることもある。

その点、札幌では何時でも専門病院で診察を受けられる体制ができていますので、「何かあったら〇〇病院へ」と決めておけば、心配ないとのこと。

後段では、救急医療体制の課題として、北海道のような広域をカバーするドクターヘリの必要性や若手脳神経外科医の養成、医療機関の主導による救急体制整備を挙げられ、他領域の専門医への啓蒙や市民啓発の重要性を説かれた。

マスコミなどでは、「重症妊婦のたらい回し」が取上げられるが、札幌市の例で見ると、実際の救急搬送患者の診療科目は、内科と脳神経外科で7割を占め、産婦人科は全体の2%以下。

特に脳神経外科に搬送される患者の半数以上は脳疾患によるものとなっている。脳疾患では発症直後の急性期治療が極めて重要であり、患者の「たらい回し」や搬送先の病院選びに時間がかかると助かる命も助からない。

患者が速やかに、専門医のチームと最新画像診断機器を備え、急性期の脳卒中医療に対応できる1次脳卒中センター(PSC)や、さらに重度の疾患にも対応できるSCU(Stroke Care Unit 脳卒中集中治療室)と呼ばれる専門設備のある病院に搬送され、安心して急性期の治療を受けられる体制整備が求められている。

最後に Act Fast について。

「Act F.A.S.T.」(素早い対応)は「兆候(F: Face、A: Arms、S: Speech)を感じたら、救急車を呼ぶ時だ(T: Time)」という意味で、脳卒中の兆候が出たら、一刻も早く専門医にかかりなさいという心得を示している。

ところが中村先生のお勧めは、「脳の心配よりまずはメタボの心配をなさい」という意外なもの。ただし、続けて「もし脳に問題あるかなと思ったら直ぐに救急車で専門病院へ。札幌の救急医療環境は日本で一番整っているし、特に行き先が〇〇記念病院ならベストです。」という心強い言葉も。これからは「Act F.A.S.T.」 and to 「〇〇記念病院」ということで安心です。

先生のお話は専門外の参加者にもわかり易く、たいへん興味深くお聴きすることが出来ました。ご講演いただきました中村先生ならびにご参加いただきました会員の皆様にあらためて御礼申し上げます。

(文責 藤井文世)